

先人の言葉から学ぶ（17）

幸福なるかな、心の貧しき者。天国は その人のものなり。・・・聖書（その2）

3 聖書について

(4) 聖書との出会い

筆者が聖書と出会ったのは高校2年（1952年）の秋で、太平洋戦争が終結して7年目であった。前年9月にサンフランシスコ講和条約が締結され、この年の4月28日から効力を発し、日本は事実上独立を回復した。というものの、未だ大方の人は貧しく人心は不安定、敗戦色を随所に残していた時勢といえる。

故郷（当時は山形県最上郡東小国村）の村役場近くに小さな公民館があって、そこで週二回キリスト教の伝道集会が行われていた。

誘われて参加してみると、上級生の女子高生数人と、若い村役場や営林署などに勤める男女など総勢15人ばかりいて、集会で聞く話は全くもったもなしばかり、異国の宗教という物珍しさに誘われ、新しい物好きも手伝って参加を重ねるようになった。

時あたかも、戦前戦中の旧体制に対する挫折感から、目に触れる新しいものに憧れ、民主主義体制下で「新生日本」を夢見ていた時代である。

集会では聖書を輪読し、両手を組んで目を閉じて祈り、終わりには細やかな浄財を捧げる（克己献金）など2時間足らずの会合は、正しい生き方を目指すにはキリスト教信仰にあるのではとさえ思われた。

集会を主宰していたのは、神学校を出たばかりの若い牧師で名は森 正義氏といった。森牧師は同村の同級生の兄で、集会がある時だけ山形市から東小国村（現・最上町）に来て、実家に泊まっていた。

クリスマスを中心に、子供たちを対象とする「日曜学校」が始まり、飾り物のお手伝いなどしながら、その後は森牧師不在時には「日曜学校」の先生も務めた。

大学生になって山形市に移ってからは、森牧師が所属する教会に通ったが、そこでは恰幅のいいアメリカ人牧師が責任者として采配していた。

森牧師から、キリスト教思想家・内村鑑三（1861～1930年）の「ロマ書の研究」という本を紹介され、早速購入して目を通した時は、魂が揺さぶられるような感動を覚

えたのを忘れることできない。今回この稿を書くにあたり、実家に積んである古本の中に同書はないか探したが、発見できず残念でならない。

大学2年の暮れ頃まで教会に通っただろうか。新しい物好きと興味本位から始まった教会通いは長く続かず、本物のキリスト者になれなかった筆者である。

少なからず信仰心を持って聖書に接し、興味を持って読んだことは、その後の人生に影響を及ぼし、単なる知識を超えた素養となって身に着いたように思う。

今回、勉強家であった森牧師をこよなく懐かしく思い、今は何処にとウェブサイトで探したところ、筑波福音基督教会でおられると判明した。もう82・3歳になられたかもしれない。

同級生友人の方は40歳で早世したが、森牧師のご健在に安堵しご活躍を嬉しく思った。インターネットの便利さに感謝したい。



(5) 口語訳の聖書発刊の経緯

この項の(2)「日本における聖書の翻訳」のところで、翻訳された歴史的な経過を述べた。ところが、その時点で筆者の調査不備から口語訳聖書その後の推移について欠落していたので補記したい。それは次のとおりで、聖書という位置付け上、翻訳に関するこの動揺は、聖典作成の難しさを如実に示している。

- ①昭和29年(1954年)、最初の「口語訳聖書」が「日本聖書協会」から出版されたが、終戦直後における漢字と国語表現の制限、加えて教義上の偏向などの諸問題が重なり評価が芳しくなかった。
- ②昭和45年(1970年)、「いのちのことば社」から「新改訳聖書」が出版された。
- ③「口語訳聖書」の不備を補い、昭和48年(1973年)に「新改口語訳聖書」が「日本聖書協会」から出版された。
- ④昭和53年(1978年)、「日本聖書協会」から「共同訳聖書」初版が発刊された。
- ⑤昭和62年(1987年)、「日本聖書協会」から「新共同訳聖書」初版が発刊された。
- ⑥その後の動きとして、2016年を目途に「標準訳聖書」を「日本聖書協会」から発刊予定で作業が進められている。

このような口語訳に関する経過を勘案するに、大正6年(1917年)に発刊された「改訳新約聖書」、即ち「大正改訳聖書」がいかに人々の間に評価を、着していたか理解できると思う。

現段階において、ほとんどの教会で口語訳聖書の何れかを採用しているが、「大正改訳聖書」に対し愛着を抱く人は今も多いのである。

筆者は、最初に「大正改訳聖書」と接したことと、文語文体表現の適切さを重視し、この稿を進めるにあたり「大正改訳聖書」をもって記したい。文語文に馴染みが薄い方もおられるだろうが、伝統的な表現法に触れるのも一益あるだろうと思う。

4 イエス・キリストの生涯

(1) 母マリアの受胎告知

聖書「マタイ伝福音書」第1章（この後は、説明上必要な場合を除き、聖書の引用箇所記載は省略する）によれば、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教を信じる民の始祖で、最初の預言者といわるアブラハム。そして、羊飼いかから身を起し全イスラエルの王となったダビデ

(BC1040～961年)を先祖とするのが、イエスの母マリアの夫ヨセフで、この二人の間にイエスは生まれた。

しかし、マリアが懐妊したとき二人は未だ婚約中で、共に暮らしていなかったが、処女マリアに天使のガブリエルが降り、マリアが聖霊によってイエスを身ごもることを告げ、マリアはそれを受け入れた。マリアの懐妊は不貞からではと疑ったヨセフは、離縁しようと思いつめぐらすが、神の使いが夢に現れ、『ダビデの子孫ヨセフよ。妻となるマリアに宿る子は聖霊によるもので、生まれるその子にはイエスと名付けなさい。民をその罪より救うからである』と。眠りから覚めたヨセフは神の使いの命令を受け入れた。この頃、ヨセフとマリアはナザレという町に住んでいた。

イエスの誕生は、『視よ、処女みごもりて子を生まん。その名をインマヌエル（神はわれらおともに）と称えられん』（旧約聖書イザヤ書第7章）という古の預言が実現したのである。



ミケランジェロのダビデ像



レオナルド・ダビンチ
の「受胎告知」

(2) 生誕と来訪者たち

神は、救世主が誕生したと最初に知らせたのは、貧しくもけなげに働く羊飼いたちであった。天使のお告げにしたがいベツレヘムの馬小屋を訪ね、飼葉桶に横たわるイエスを拝したのである。

また、イエス誕生に先立ちその標しを見たのは、はるか東方の国ペルシャ（現在のイラン）の占星術3人の学者（博士）たちであった。この星占いの標しは、そのころ占星術で「王子誕生」と呼ばれる月に、数年にわたり天狼星（大犬座α星シリウスの

こと。天空で最も明るい星)が明け方異常な光を放ったといわれる。この現象は当時の人々の記録に残る歴史的事実とされている。

遠い道のりをベツレヘムまでやって来た彼らは、ユダヤのヘロデ大王(ローマ帝国統治下でユダヤを支配。在位はBC37~4年)に『ユダヤ人の王としてお生まれになった方は何処か』と尋ねたが、ヘロデには知らなかった。ヘロデは、探し当てたら知らせるように命令するが、3人の博士はそれを無視した。

イエスを探し当てた3人の博士は、イエスを拝み貴重な乳香(ボスウェリア属の樹木から造られる香料、薬物)、没薬(コンミフォラ属の樹木から取れる香料、鎮痛薬)、黄金を贈り物としてささげた。

(3) ヘロデ大王の幼児虐殺とヨセフ一家のエジプト脱出

ヘロデ大王は、「ユダヤ人の王」「救世主」が誕生したことに恐怖を覚え、イエスを捜して殺せと命令したが、その直前に父ヨセフは『エジプトに逃れよ』と夢で天使のお告げを受け、一家は急ぎエジプトへと逃れた。

それを知らないヘロデ大王は、イエスを発見できない苛立ちから、ベツレヘムと近郊に住む2歳以下の男児をことごとく殺させた。

(4) ナザレへの帰還とイエスの洗礼

ヘロデ大王は紀元前4年に死去したのは、歴史的に確定されている。西暦年はイエス誕生をもって元年としているが、ヘロデ大王の生存中にイエスが生まれたと聖書にあるため、イエスの誕生は紀元前4年より前となる。現在の学説では紀元前7~4年の間とされている。

ヘロデ大王の死後、三男のヘロデ・アンティパス(在位、BC4~AC39年)が後を継ぐが王を名乗ること許されなかった。アルケラオスは失政を重ね住民によってローマに訴えられ勢力を失ったのを機に、イエス一家はイスラエルに戻る。

戻ったイエスは、最初に洗礼者・バプテスマのヨハネ(一説では、イエスと従兄弟)と会い、ヨルダン川でヨハネによって浄化儀式である洗礼を受ける。その時、天がひらけ、『イエスこそ自分の子である』という神の声が聞こえた。これがイエスの公生活(神の子、救い主、宣教)の始まりとされ、この時イエスは30歳であった。

(5) 弟子たちの召命

イエスは洗礼を受けた後、霊によって荒れ野に送り出されて40日間留まり、断食と祈りの日々送るが、悪魔(サタン)から三つの試練・誘惑を受けるが、『サタンよ去れ。主たる神を拝し、只神にのみ仕えるべし』と、ことごとく退けられた。

その後、ガリラヤ湖のほとりでイエスの呼び掛けに漁師のペテロとアンデレ兄弟が、また収税所で取税人のマタイが従った。

(6) イエスの奇跡

イエスは人々に教えを説き、時によって数々の奇跡(人間の力や自然法則を超えた、

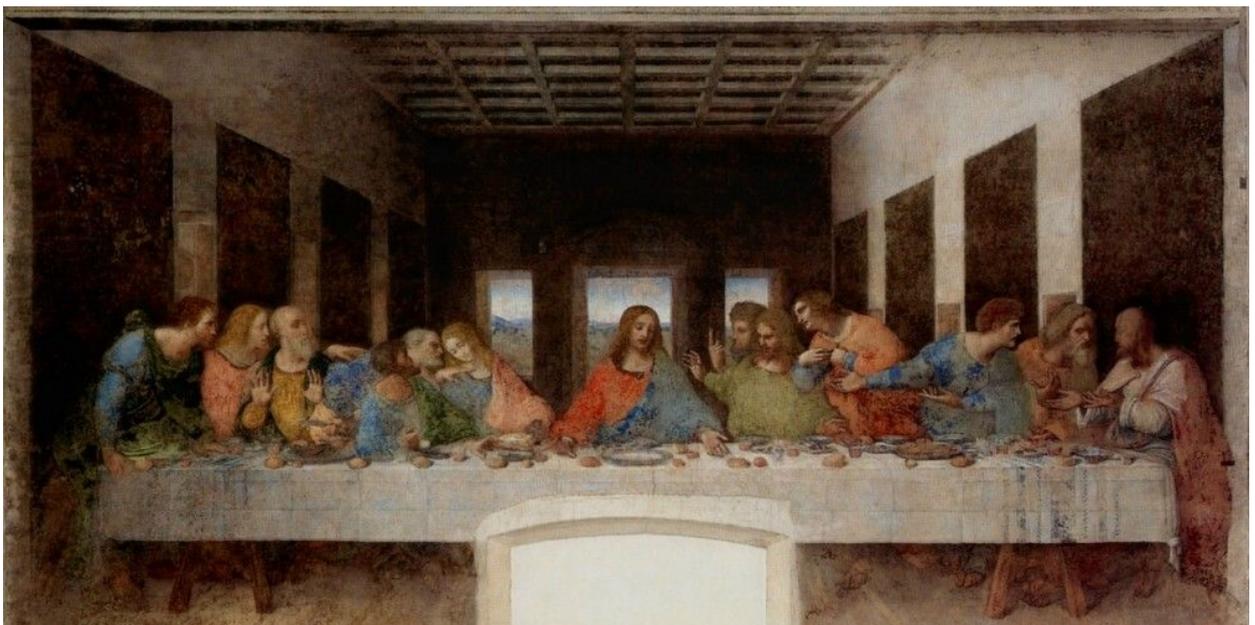
神などの力による超自然のできごと) を行った。これを読者諸氏が信じるかどうかは別として、聖書にはそのように書かれている。聖書はイエスの死後、弟子である使徒たちによって書かれた記録であり、イエスの死後 30 年 (AC60 年) 頃から、宣教と受難の中で書き進められたと言われる。

その時期から推して、書かれている内容や奇跡についても、実際にその場面を実見した人も、見た人から聞いたとという証人も沢山存在した可能性があるため、イエスのなした数々の奇跡は、あながち全てが作り話であったと言い切ることができないと思うが如何であろうか。

- ・水をぶどう酒に変える奇跡 (カナの婚礼)
- ・嵐を静める奇跡
- ・パンの奇跡 (五千人の給食, 四千人の給食)
- ・海上歩行
- ・いちじくの木を枯らす奇跡
- ・王室役人の息子の癒し
- ・中風の人癒し
- ・らい病人の癒し
- ・盲人の癒し
- ・手足の不自由な人の癒し
- ・唾者の癒し
- ・悪霊追放による癒し
- ・ヤイロの娘、ナインのやもめの息子、ベタニヤのラザロなど死人の甦り

(7) 最後の晩餐

最後の晩餐の場面は、レオナルド・ダビンチ (1452~1519 年) の絵画があまりにも有名である。



レオナルド・ダビンチの最後の晩餐

最後の晩餐とは、イエス・キリストが処刑される前夜、十二使徒（選ばれた12人の弟子）と共に摂った夕食であり、次のようなことがあったと聖書に書かれている。

イエスは、使徒の一人が私を裏切ると告げ（イスカリオテのユダの裏切りの予告）られ、それに使徒たちは自分の苦難（裁判と処刑）に際して逃げ散る事を予告する。

この言葉を聞いて弟子たちは驚いた。更に、ペテロは明け方の鶏が鳴く前に三度キリストを否むと告げられたので、ペテロはこれを強く否定する。

イエスは賛美の祈りの後、パンと葡萄酒をそれぞれ「自分の体」「自分の血」として弟子たちに分け与え、『これをわたしの記念として行え』と命じたとされている。

(8) イエスの捕縛と裁判

最後の晩餐の後、イエスは山（ゲッセマネの園）に行き祈られた。

その時、イエスを捕らえるために司祭長と長老たちにローマ兵も加わり、裏切ったイスカリオテのユダの先導によって集団で現れた。暗い中でもイエスを特定できるように、ユダが口付けをするという取り決めであった。先ず、イエスが『だれを捜すのか』と言葉を發したところ、『ナザレ人のイエスを』と彼らは答えた。それに対し『それは私である』と言ったので、この言葉を聞いた司祭長、長老とローマ兵たちは、後ずさりし弾かれたように地に倒れた。

イエスは自ら身を渡して、裁判を受けるために連行され、弟子（使徒）たちは自分たちに難が及ぶのを恐れ逃げ散った。捕えられたイエスは、大司祭の問いに対し『人間を裁くため、天から地上に遣わされた神である』と答えたため、イエスが神を冒涇したと宣言され、一致して死刑に相当すると答えた。

当時のユダヤ人には死刑を決定し執行する権限がなかったため、ローマの行政官で総督のピラトから死刑の判決を引き出す必要があった。

ピラトはイエスに『ユダヤ人の王であるか』と尋ねた。イエスは『そのとおりである』と答えた。更に尋問したピラトには、イエスを死刑にする罪を見出せなかった。

しかし、司祭長や群衆は納得しなかった。群衆はイエスを十字架につけると叫んだ。暴動になりそうだったのでピラトはイエスを外に引き出して、イエスを十字架につけるよう宣告し兵士に引き渡した。

(9) イエスの処刑

イエスは十字架を背負って総督ピラトの官邸（プラエトリウム）から刑場のあるゴルゴダの丘までの道のりを歩いたとされている。

十字架刑はその残忍性のため、ローマ帝国でも反逆者のみが受ける最も重い刑罰で、ローマ市民権の保持者はこの刑から除外されていた。

1前半の30年頃、当時のユダヤ教のあり方を批判し、人々に真の神の教えを説いていたイエスが磔刑されたのは歴史的事実とされ、その日は3月14日であった。

ここに、救い主であるイエス・キリストは人類をその罪から救うために、身代わりとなって十字架に上ったのである。処刑人がイエスの脇腹を槍で突き刺すと、血と水

が流れ出た。イエスは『私の霊を御手に』と大声で叫ばれ、頭を垂れ息絶えた。

この時、太陽は光を失い辺りは暗闇に包まれ、神殿の垂れ幕が真二つに裂け、地震が起きた。この情景を見た兵士たちの多くが、イエスは神の子だと信じたという。

(10) 埋葬と復活昇天

夕方になると、アリマタヤのヨセフは勇気をもってピラトのところに行き、遺体埋葬の許可を願い出て許可され、十字架から遺体は降ろされた。遺体に香油を塗り亜麻布に包み新しい墓の中に納めた。それは岩を切って造った墓であった。

司祭長たちは、イエスの弟子たちが遺体を盗み出し、『イエスは復活した』と言いふらすのを危ぶみ、墓の入口に大きな石が転がして封印し、番兵たちを見張りに付けた。

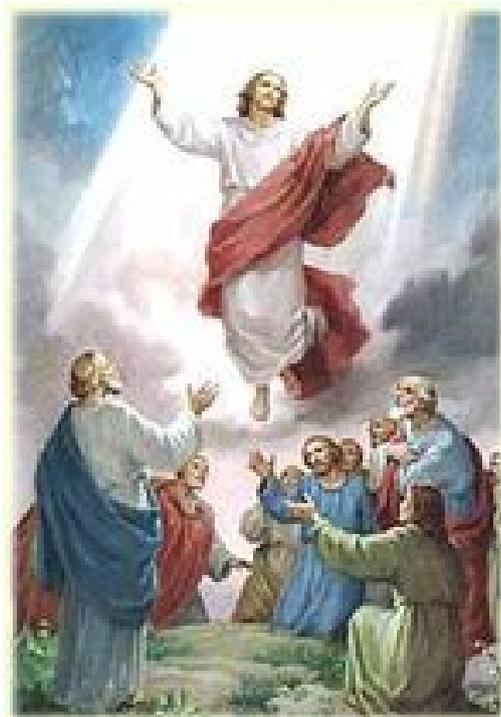
処刑から3日目の3月17日明け方、マグダラのマリアと女性たちは遺体に香油を塗るため墓に向かった。道々石をどうして除けるか心配しながら訪れると、大きな地震が起きて天使が現れ入口の石を転げて除かしその上に立った。兵士たちは金縛りに遭ったかのように身動きできない中、天使はイエスが復活されたことを告げ、マリアたちを墓の中に入らせたがイエスの遺体は見当たらなかった。続いて天使は、イエスの復活をペテロと使徒たちに告げよと命じた。

マグダラのマリアも使徒たちもイエスの復活を信じ難い思いでいると、復活したイエスは使徒たちの前に姿を現したのである。

一方、番兵からこの話を聞いた司祭たちは、番兵に金を与え、『我々の寝ている間に、誰かがイエスの死体を盗んでいった』と言い触らせと命令した。

復活したイエスは、真理と宣教の認識を弟子たちに教え、様々な奇跡を示して指示を与え、世の終わりまで彼らとともにいるであろうことを約束され、復活から40日目の4月25日、エルサレム近郊のベタニアに弟子たちとともに向かわれた。

イエスは両手を挙
身は高く上がられ天



げて一同を祝福し、御
に昇って行かれた。

(この項、つづく)

参考文献

旧新約聖書・文語訳（日本聖書協会）

イエス・キリストの生涯（講談社文庫）

イエス・キリストの生涯の要約（新教出版者）

仏教とキリスト教の比較研究（筑摩叢書）

著者：三浦 綾子

著者：ブレイズ・パスカル

訳者：森川 甫

著者：増谷 文雄